地鶏の起源と定義

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
著者名	佐藤,優
発行元	鶏病研究会
巻/号	47巻1号
掲載ページ	p. 1-11
発行年月	2011年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

≪解　説≫

地鶏の起源と定義

佐藤　優

株式会社　秋田鶏病中央研究所，〒017-0002 秋田県大館市白沢字松原 739-1

要　約

鶏は，今から約 2000 年以上前に中国，朝鮮半島あるいは南西諸島などを経てわが国に渡来した。渡来当時の鶏は，体型・羽色がセキショクヤケイに類似していたと考えられている。その後，小国が 8～12 世紀頃中国から渡来した。江戸時代になると，大軍鶏，大唐丸，チャボ，烏骨鶏，コーチンなどがアジア諸国から渡来し，以前からわが国で飼われていた鶏種を地鶏と呼ぶようになった。わが国には，約 40 種類の日本鶏が現存しているがその多くは江戸時代の終わり頃までに作出された。地鶏，小国，大軍鶏の三鶏系がこれら多くの日本鶏作出の礎になったといわれている。明治以降，ヨーロッパ，米国などから多くの外国系鶏種が輸入され，地鶏は次第に減少した。地鶏はわが国の保存すべき貴重な文化的資産である。岐阜地鶏，猩々地鶏，小地鶏の三品種が 1941 年に国の天然記念物に指定された。近年，地鶏名を付けた多くの銘柄鶏肉が市場に見受けられるようになり，1999 年に特定 JAS 制度による地鶏が定められた。

キーワード：地鶏，日本鶏，特定 JAS 地鶏，銘柄鶏

はじめに

東南アジアで発祥した鶏は，今から約 2000 年以上前に中国・朝鮮半島あるいは南西諸島などを経てわが国に渡来したと考えられている。渡来当時の鶏は，セキショクヤケイに類似する原始的な体型・羽色を備えたいわゆる古代鶏であったといわれており稲作の広がりとともに国内各地に伝播され明治の初め頃まで広く飼われていた[26]。

また，この古代鶏は平安時代に渡来した小国鶏や江戸時代に渡来した軍鶏および大唐丸などと共に日本固有品種作出の礎ともなった。江戸時代に，新たに渡来した大唐丸，矮鶏，軍鶏や烏骨鶏などの外来鶏種に対し古くから各地で飼われていた古代鶏や小国鶏あるいはこれらの交雑鶏などの在来鶏を地鶏と呼ぶようになった。明治維新後，投機を目的に多くの外国鶏種が多数輸入され，以前から飼われていた古代鶏や小国鶏，大唐丸，軍鶏および江戸時代に作出された多くの日本鶏などを一般に地鶏と総称するようになった。このようなことから 1891（明治 24）年に日本家禽協会は，「地鶏をわが国における最も古い鶏種の品種名」とすることを定めその標準を掲げた[26]。岐阜地鶏（普通地鶏，岐阜県），猩々地鶏（三重県），小地鶏（高知県）などは，古代的な外貌的特徴を維持している品種としてよく知られているが，外国鶏（西洋鶏種）の普及につれて希少となり 1941（昭和 16）年 1 月 27 日，史跡名勝天然記念物保存法第 1 条（戦後，文化財保護法）に基づいてこれら 3 鶏種を一括して“地鶏”名称で国の天然記念物に指定し，貴重な文化的生物資源として保護されるようになった（表 1）。

一方，地域活性化のため各都道府県が開発した高級鶏卵・鶏肉用地鶏が飼養され高付加価値商品として販売されている。しかし，地鶏名を付けた鶏卵・鶏肉商品が乱売されるようになり，これら生産物の規格を明確にして消費者の誤解や不信を解消するために 1999（平成 11）年 6 月 21 日に地鶏肉の日本農林規格（以下，特定 JAS 制度）が導入された。

特定 JAS 地鶏の普及により天然記念物に指定された日本古来の“地鶏”は日本鶏愛好者や研究者以外の多くの人々に忘れ去られようとしている。

以下に，鶏の成立およびわが国への地鶏の渡来概要と特定 JAS 制度について述べる。（鶏種名については法定名称を用いた，ただし，引用文についてはその表記に従う。）

1. 鶏の起源

鶏の生物分類は，キジ目（鶉鶏目），キジ科，ニワトリ属，ニワトリである。キジ目は中型から大型の半地上性

2010 年 10 月 5 日受付
鶏病研報 47 巻 1 号，1～11（2011）

表 1. 地鶏の定義

Ⅰ広義の地鶏（江戸時代以降）
各地方で飼養されている在来鶏の呼称
Ⅱ文化財保護法に基づく天然記念物指定名称“地鶏”
（岐阜地鶏，猩々地鶏，小地鶏の法定名称）
Ⅲ特定JAS法に基づく地鶏

の鳥で翼は丸く短い。ニワトリ属は，ニワトリ（*Gallus gallus domesticus*）とセキショクヤケイ（*Gallus gallus*），西インドに分布するハイイロヤケイ（*Gallus sonneratii*），スリランカに生息するセイロンヤケイ（*Gallus lafayettii*）およびジャワ島，バリ島などに生息するアオエリヤケイ（*Gallus varius*）のヤケイ4種より構成されている。

セキショクヤケイは，ヤケイの中でも分布域が最も広く，北インドから中国の雲南省，海南島，インドシナ半島，フィリピン，南太平洋諸島などの林縁部二次林に広く生息し，鳴き声は鶏と同様である。また，留鳥で30～100 m位は飛翔するが渡り鳥のように長距離は飛べない。セキショクヤケイの特徴は，気候，風土への適応能力が高く変異し易い。脚色は青色（鉛色）で，生息域によって赤耳朶，白耳朶などがあり4亜種に分類されている。雄の体重は成鳥で約500 g，羽色は赤笹である。尾羽は7対あり，1対の謡羽は低く弧を描くように伸びている。冠は赤色で深く切れ目のある直立した単冠である。雌の体重は成鳥で約450g，羽色は黄褐色の地に梨地斑といわれる小斑が散在している。セキショクヤケイの野生種は一夫多妻で春の繁殖期には4～8個前後の卵を産み就巣性が強い[9,28]。

鶏の原種はヤケイであるといわれているが，セキショクヤケイから作出されたという一元説とセキショクヤケイを主体にハイイロヤケイ，セイロンヤケイ，アオエリヤケイもその成立に関与しているという多元説の二通りの説がある。詳細については各解説[25,28,29]があるので本文では省略する。

家畜とは，「人間の飼育管理の下で繁殖が可能であり，人間の利用目的に適するような形質・能力を持つものに人間によって遺伝的に変化させられ，そのような性質を子孫に伝えることができるもの」と定義されている[11]。ヤケイから家畜化された時代や地域は定かではないが，鶏の発祥地はインドの東方，インドシナ半島の西北部，中国の四川省，雲南省の西南にわたるマレー半島の広いジャングル地帯で稲作文化が出現した頃であろうと考えられている[6,26]。稲作は山間部の焼畑耕作に始まり，次第に低地での水田耕作に移行してインド，ビルマ，タイなどに伝播した。鶏の伝播は，その稲作の伝播に随伴したといわれている[6]。最も古い鶏の遺物は，インダス文明（紀元前2500～1800年）の栄えたパキスタンのモヘンジョ＝ダロの遺跡およびハラッパーの遺跡（紀元前2500年頃）から発掘されている[28]。モヘンジョ＝ダロの遺跡には，当時約4万人が暮らし，上下水道が整備された高度な計画都市であった。出土品に含まれていた鶏大腿骨の長径は103 mmで，紀元前2000年頃と推定されている。Nishidaら[20]の日本在来鶏の骨計測学的研究によると，セキショクヤケイ雄の大腿骨長径は約78 mm，岐阜地鶏は約76 mm，小国は約80 mm，シャモは約114 mm，白色レグホンは約95 mmである。このようなことから，その時代以前に長期にわたり人為的選抜が加えられ家畜化が始まった時期は紀元前3000年頃であるといわれている。また，加茂[5]によると鶏をかたどった印章や粘土像も一緒に出土し，印章には2羽の鶏が戦っている様子が刻まれていた。当時のニワトリは報晨，祭祀等の用途に加えてすでに闘鶏も行われていたと推察されている。一方，秋篠宮[1]は，著書「欧州家禽図鑑」でモヘンジョ＝ダロの遺跡とともにバーバラ・ウエストの見解を紹介している。バーバラ・ウエストは，そもそも鶏は東南アジアで家禽化され，その後北上し中国にて成立されたという見解を述べている。彼によると，最初の記録が中国の河北省武安県の磁山および河南省新鄭県の裴李崗からの鶏の遺物は，放射線炭素分析法により紀元前6000年頃と年代測定されている。また，紀元1世紀までの中国における鶏の遺物が出土している遺跡18箇所のうち16箇所までがモヘンジョ＝ダロの遺物より古いものであると述べている。

2. 鶏の渡来

東南アジアで発祥した鶏は，稲作文化などに随伴して西，南，北の3方向へ伝播したと考えられている[19,23]。第一のルートは西へ，インドからペルシャ，エジプトさらにはヨーロッパへと広がった。加茂[5]によると古代エジプト第18王朝のトトメス三世の時代（紀元前1501～1447年）に，毎日卵を産む鶏が記録されていると述べており，鶏の適応性の高さが窺われる。第二のルートは南へ，マレーからインドシナなどの東南アジアの島々を経て，ミクロネシア，メラネシアへと，さらに一部はフィリピンから南西諸島を経て日本へと考えられている。第三のルートは北へと，インドシナ半島から雲南省，四川省，江西省から中国大陸全域，朝鮮半島，そして日本へというルートである。この第三のルートが鶏の日本への主な伝播経路と考えられている。鶏は中国の四川省，雲

南省さらには揚子江流域に広がり，殷（紀元前 1300～1050 年）の時代にはすでに牛，馬，豚，犬や鶏を意味する亀甲文字があった。また，紀元前 1400 年頃に「野鳥の肉は食してもよいが，家禽の肉は食べてはならない」という鶏愛護令が公布されていて，当時の鶏の利用は報晨，卜占，闘鶏などであった[26]。

わが国への鶏の渡来について野澤と西田[23]は，日本およびその周辺地域に飼われている在来の鶏の羽色と羽装，冠および脚色などの遺伝形質を調査した結果，外部形質を支配しているほとんどの遺伝子は朝鮮半島を経由していたが黒色および銀色の羽色を発現する E および S 遺伝子は第二のルートに結びついていると述べている。藤尾[2]は，鶏の B 血液型遺伝子について考察したところ，台湾地鶏，シマドリ（琉球諸島在来鶏），トカラ地鶏，薩摩鶏，比内鶏は BG．BM 両遺伝子の出現頻度が高く，韓国地鶏は BA．BK 両遺伝子の出現頻度が高かった。BG. BK 両遺伝子は台湾，南西諸島のルートからわが国に持ち込まれたらしいことを示している。セキショクヤケイの形質をとどめた岐阜地鶏は BA．BG，伊勢地鶏は BM 遺伝子のみを持っている。このようなことから，わが国の地鶏は朝鮮半島からの北ルートと島づたいの南ルートから渡来した鶏によってお互いに混じり合って作られている可能性があると述べている。

鶏が渡来した時代は定かではないが縄文晩期の愛知県伊川津貝塚遺跡や弥生中後期の静岡県登呂遺跡などから鶏の遺骨が出土している。また，4 世紀頃に造られた各地の古墳周辺から埴輪鶏が出土している[13,26]。以上のようなことから，鶏は古墳時代にすでに日本各地で飼われていたと考えられる。一方，小穴[26]は，秦の時代に徐福が山東から朝鮮（鶏林）に渡り，細尾鶏と称する長鳴きの長尾鶏，五穀の種子および農耕用具などを携えて山陰の出雲地方に上陸したのではないかとの見解を述べている。

3.　日本鶏の概要

縄文晩期から弥生時代頃にわが国に渡来したセキショクヤケイに類似する原始的な羽色・体型を備えた古代鶏は，稲作文化とともに広がり国内各地で飼われるようになった。

鶏の飼養目的は愛玩，報晨，闘鶏，祭祀および卵肉食用などが考えられる。古代においては闇夜を打ち破って悪霊を追い払い，日の出をむかえる暁の鶏鳴，稲や他の作物の豊作を約束する太陽の崇拝，強いては鶏の霊性信仰まで発展して稲作文化と密接に関係していたといわれている[6]。古墳から埴輪鶏が出土されているのも死者が甦る際に闇を開く鶏鳴が必要であったのであろう。

「古事記」や「日本書記」に記載されている天の岩戸の常世の長鳴鶏はよく知られている。鶏は，古くはカケと呼ばれていた。例えば「古事記」には，八千矛神の歌の中に「爾波都登理，迦礼波那久」（ニワツトリ　カケハナク）とある。また，「萬葉集」では可鶏，あるいは，ただ鶏と書いてカケ，トリ，ニハツトリと読ませている[26]。村松[13]は，マレー方面ではクク，ジャワではココ，ミンダオ島のダガロク族はココー，呉人，漢人はケイと呼んでいたと記述している。いずれの鶏の呼称も雄の鶏鳴に由来するといわれている。本居宣長[16]は，カケは鶏の鳴き声によって付けられた名で，ニワツトリは庭の鳥の意で，当初はカケの枕詞として用いられていたが，それが本名になったと述べている。また，鶏は，大和ことばの丹羽鳥の字を当てることもある。古代における原始的な鶏の羽色は赤色すなわち赤笹または猩々のようなものではなかったかと推察されている。赤笹とは，日本鶏でよく見られるセキショクヤケイに類似する羽装で，雄は胸，腹，尾にかけて黒くなっており他の部分が赤色，雌の羽装は黄褐色に細点斑が入るいわゆる梨地で，猩々とは黄褐色（赤橙色）のことである。強いて区分する際には羽色により丹雄鶏（赤笹），白雄鶏，丹鶏（アブラ鶏），黄鶏をカシハ鶏などと呼んでいたようである。わが国では小国が渡来するまでの長い期間，古代鶏（地鶏）のみが広く飼われていた[26]。

平安時代になると中国とわが国の交流は遣唐使の派遣により盛んとなり，その際，小国鶏（昌国，和鶏，大和鶏，正告）が渡来したといわれているが，その年代は定かではない。なお，遣唐使は 630 年舒明天皇のとき犬上御田鍬などを最初に派遣した。その後 894 年までの約 260 年間に 18 回企画されたがそのうち 15 回実行された[14]。江戸時代の博物学者畔田翠山[7]は「古名録」(1843) において，寧波（ニッポー）とは揚子江河口にあることを述べ，「小国は即ち昌国なり。蓋し，古，遣唐使，寧波の明州に着く，即ち其の地に産する美鶏を以って日本に携え帰り，即ち，その昌国の地名を称えて鶏名となす」と記述している。

一方，村松[14]は，遣唐使の頃の船舶や航海技術が未発達で中国の往来は難航路であったこと，さらに昌国と云われた処は現在の定海県（東シナ海の舟山列島）であり，唐の時代には翁山県と呼ばれ，宋の時代に至って昌国県となったこと，鳥獣人物絵巻（鳥羽僧正，1053～1140 年），明月記（藤原定家，1180～1235 年）などの書籍，絵画に描かれていることなどの時代考証により日宋貿易によって日本に渡来したのではないかと推察している。な

お，鳥獣人物絵巻には地鶏，小国鶏のほかに軍鶏に似た鶏が描かれている[6,14,26]。

小国という名称はわが国で付けられた名で，中国では「長鳴鶏」と呼ばれ，その特性は，長尾鶏で羽色は5色，冠は一般に単冠，体格は大きく闘鶏として使われ長鳴性で鳴き声の長さは普通鶏の2～3倍で時刻を正確に告げるなど，小国の特徴とよく類似している[26]。小国は，美麗であるが古くからいた鶏よりも大型で勇敢に闘い宮廷貴族の闘鶏（鶏合せ）に盛んに用いられた。また，庶民の間でも闘鶏が行われ続け，江戸時代初期に軍鶏が到来するまで闘鶏における首座を占めていたと述べている。なお，わが国における鶏の用途は，天武天皇の頃，卵肉の食用禁止令が発令されて以降，主に報晨と闘鶏であった。

渡来人が日本へ持って来たセキショクヤケイの羽色・体型に類似した古代鶏（地鶏）と平安時代に渡来した小国鶏あるいはそれらの交配子孫の時代が江戸時代まで続いた。小国鶏は江戸時代に書かれた「和漢三才図会」(1712)，「本草網目啓蒙」(1806) にその名が記述されているが，「大和本草」，「本朝食鑑」，「飼籠鳥」，「鳥名集」や明治以降の「日本家禽全書」，「日本家禽協会標準」などには小国鶏の記載がない[13]。1924年，小穴が家禽研究の「日本種鶏号」に小国鶏を記載し，標準になき種類と述べている。

小国鶏は，土佐のオナガドリ，東天紅鶏，蓑曳鶏，蓑曳矮鶏，黒柏鶏，蜀丸など多くの鶏種の成立に関与しながら大正末期まで明確な記述がなされていない（図）。このことについて村松[14]は，地鶏と小国が類似した姿であり，さらに長い歴史の中で両鶏種の間で交雑が行われ色々な形体のものを生じはっきりした区分ができず，これらの集団を一括して地鶏あるいは小国と呼んでいたのであろうと述べている。

徳川幕府の確立により世情が安定し朱印船貿易や南蛮貿易が盛んとなり，中国，タイ，マレー，ベトナムなどの東南アジアから大唐丸（絶種），矮鶏，烏骨鶏および軍鶏などの新しい鶏種が次々と渡来し，次第に各地に広がった。江戸時代中期には，蘭丸（紅毛鶏），反毛鶏，カラヒト（イギリス），九斤（コーチン）などが渡来した。これらの鶏種の渡来が何年頃かについては定かではないが，江戸時代初期に林羅山によって書かれた「多識編」(1612) にはすでに蜀丸と矮鶏が記述されており，人見（野）必大著「本朝食鑑」(1692) には地鶏のほか新たな外来鶏であるチャボ，大唐丸，烏骨鶏，反毛鶏が記載されている[13]。地鶏の呼称は，江戸時代に入ってから使用されはじめ，地は地犬，地酒と同様に土着，土地，地方の意味で，新たな外来鶏に対し従来からいた古代鶏や小国鶏などの在来鶏種全体を指していた。当時は現在のような鶏種名がなく，単に地鶏と呼んでいたようである[26]。土の上で飼われているので地鶏という訳ではない。当時は平飼いもしくは放し飼いが鶏の一般的飼養方法であり，自然交配によって多くの交雑鶏がいたと思われる。これらの渡来した鶏が日本文化の中で培われながらもその形質を長期間保持し続けた地鶏と小国鶏，突然変異を利用し固定された土佐のオナガドリ，鶉矮鶏，地頭鶏など，地鶏と軍鶏の交配・固定化によって河内奴鶏，比内鶏など，小国鶏と軍鶏の交配・固定化によって声良鶏，薩摩鶏，蓑曳鶏など多くの日本鶏が作出された（図）。その要因は鎖国制度によって外国産珍鶏の輸入機会が少なくなり，既存の鶏種を材料にして育種改良したことや世情が泰平となり庶民が精神的，経済的に余裕ができたこと，賭け闘鶏の流行，愛玩鶏の興隆，幕府の養鶏振興などがあげられる。とくに，三代将軍徳川家光，水戸光圀，八代将軍吉宗は武士の生計の一助としてサムライ養鶏の普及に力を入れた[15,26]。

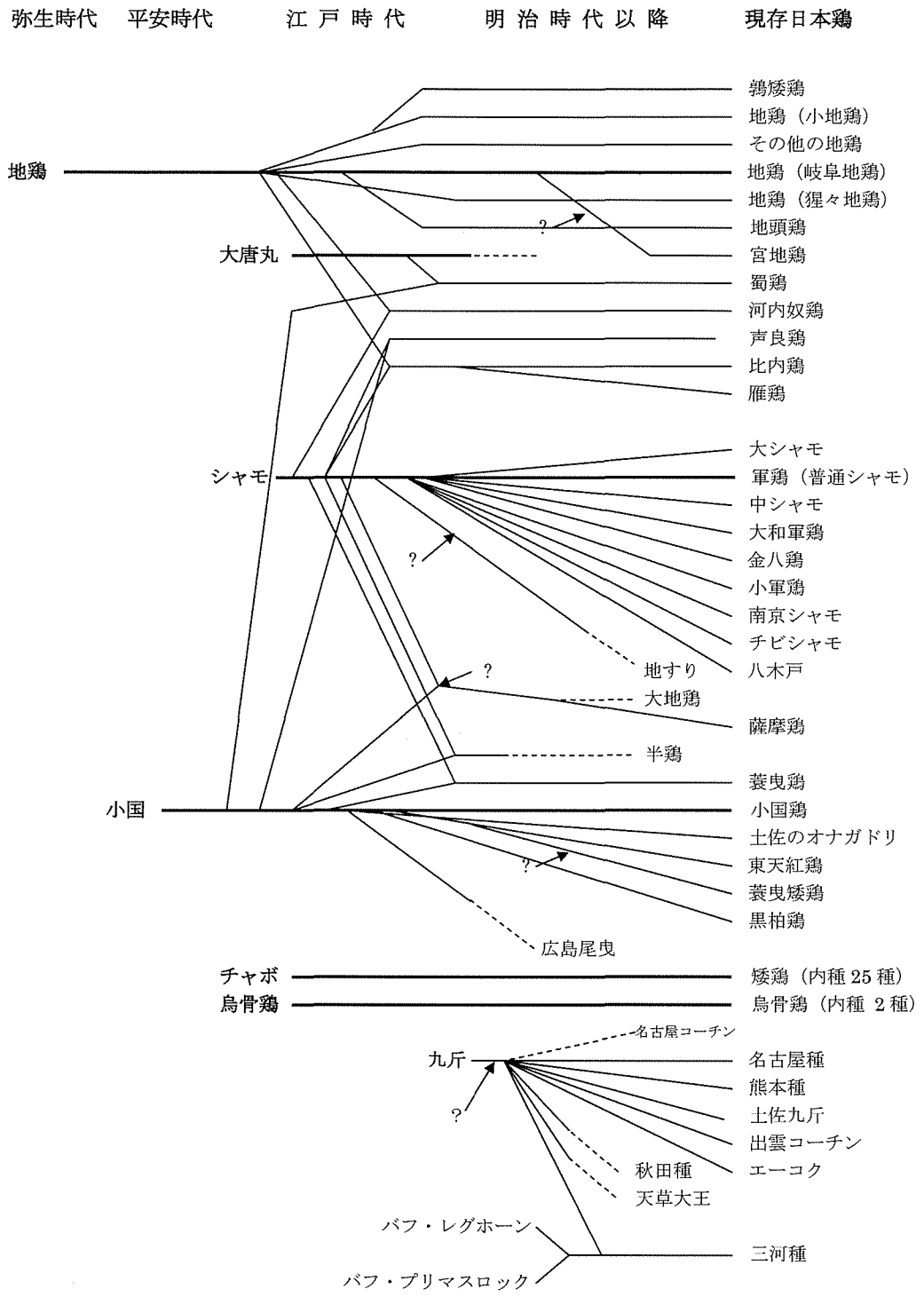
江戸時代の地鶏は，佐藤信淵[37]の「経済要録」(1828) によると2～6才の稚鶏は毎年140～150個の卵を産んでいたとのことである。地鶏は西洋鶏と異なり晩熟性で数年間産卵を続けたようである。江戸後期になると在来鶏とシャモの交配によって生まれたいわゆるシャモオトシが鍋料理として喫食されるようになった。

明治時代に入ると，地鶏，軍鶏，土佐のオナガドリ，矮鶏，東天紅鶏，蓑曳鶏，大唐丸（現在の蜀丸とは異なる），蓑曳矮鶏など現在知られている日本鶏名が記載されるようになった。

一方，文明開化により外国との交流が頻繁となり，欧米流の進歩した養鶏技術と改良された鶏が多数輸入された。とくに，明治初年から20年頃にかけて，多くの鶏種が投機目的で日本に輸入され地鶏などの日本鶏は次第に減少した[4]。

明治以降に導入された西洋鶏に対して以前から飼われていた在来鶏を一般に地鶏と総称するようになった。本来の地鶏は，セキショクヤケイに類似する原始的な羽色（赤笹型）・体型を備えた古代鶏に付けられている名称であり，1891（明治24）年に日本家禽協会は，「地鶏をわが国における最も古い鶏種の品種名」とすることを定め，同協会制定の「本報家禽審判法」（日本家禽協会報告第6号）にその標準を掲げた[26]。

三井高遂・衣川義雄[9]は，「地鶏という名称は一般にガルス・ガルス（*Gallus gallus*）に類似せるもの，即ち，原始的なる体型羽色（Primitive type）を有するものに



図．日本鶏の系図（小穴[26] 1951，村松[13] 1977 より引用，一部著者改変）
注）天然記念物指定鶏については法定名称を用いた。
注）？は不明種との交雑を示す。

名づけられるのであるが，また，ある一地方に最も普通なる鶏種に対してこの名を與へられることもある。英国において，オールド・イングリッシュ・ゲームの如きものを地鶏（native fowl）と称し，その型を land type という」と述べ，1891（明治24）年，家禽協会が定めた地鶏の定義に地方種も付け加え，地鶏の項目に土佐地鶏，岐阜地鶏，山陰地鶏，朝鮮地鶏，鹿児島地鶏（薩摩鶏），地すり，地とっこ（地頭鶏），天草大王，幌どり，半鶏（はんと），大和鶏（小国鶏），広島尾曳，雁鶏および比内鶏を列記している。

一方，日本鶏の研究をしていた小穴[26]は，地鶏と小国鶏の尾羽の配列が異なることを発見し，外貌的特徴に基づいて日本鶏を地鶏型，小国型，シャモ型，九斤型の4つに分類して，地鶏の項目に岐阜地鶏，猩々地鶏，小地鶏を列記し，1891（明治24）年に日本家禽協会が定めた定義を踏襲している。小穴をはじめ，当時，文部省の天然記念物専門委員であった鏑木，その他の多くの関係者の努力によりこの3鶏種が1941（昭和16）年“地鶏”の名称で国の天然記念物に指定された（表2）。国の天然記念物以外の地鶏として芝鶏（新潟県），トカラ地鶏（鹿児島県宝島口之島）が知られている。

4. 特定JAS制度による地鶏（特定JAS地鶏）とその問題点

1) 特定JAS地鶏の概要

消費者の本物志向や生産者の高付加価値志向などの社会的要望により，1993（平成5）年6月「農林物質の規格化および品質表示の適正化に関する法律」（以下，特定JAS法）が改正され，特別な生産方法または特色ある原材料などに着目した特定JAS制度が導入された。食鳥業界においても，消費者のより美味しい鶏肉嗜好に応えるために飼育形態，給与飼料，出荷日齢などを差別化した飼育方法により生産された鶏肉・加工品に地鶏を冠した商品が数多く販売された。しかし，消費者の誤解や不信が多く，その解消のために定義の明確化と表示の適正化が求められていた。このようなことからJAS法が改正され1999（平成11）年7月に地鶏肉の日本農林規格（以下，特定JAS地鶏）が施行された。その後，2005（平

表 2. 国の天然記念物指定鶏（15鶏種2グループ）

法定名称	一般名称[注1]	指定年月日	雄標準体重[注2]	雄標準体重[注2]	主たる産地
土佐の長尾鶏		大正12年3月7日			
土佐のオナガドリ	尾長鶏	昭和27年3月29日	1800 g	1350 g	高知県（特別天然記念物指定）
東天紅鶏	東天紅	昭和11年9月3日	2250 g	1800 g	高知県
鶉矮鶏	鶉尾	昭和12年6月15日	675 g	600 g	高知県
蓑曳矮鶏	尾曳	昭和12年6月15日	937 g	750 g	高知県
声良鶏	声良	昭和12年12月21日	4500 g	3750 g	青森県，秋田県
蜀鶏	唐丸	昭和14年9月7日	3750 g	2800 g	新潟県
蓑曳鶏	蓑曳	昭和15年8月30日	2500 g	1800 g	愛知県，静岡県
地鶏[注3]	岐阜地鶏	昭和16年1月27日	1800 g	1350 g	岐阜県
地鶏	猩々地鶏	昭和16年1月27日	1800 g	1350 g	三重県
地鶏	小地鶏	昭和16年1月27日	675 g	600 g	高知県
小国鶏	小国	昭和16年1月27日	2000 g	1600 g	三重県，京都府，滋賀県
軍鶏[注4]	軍鶏	昭和16年8月1日			東京都，青森県，秋田県，その他
矮鶏	チャボ	昭和16年8月1日	730 g	610 g	東京都，千葉県，埼玉県，その他
比内鶏	比内鶏	昭和17年7月21日	3000 g	2300 g	秋田県
烏骨鶏	烏骨鶏	昭和17年7月21日	1125 g	900 g	東京都，三重県，大阪府，その他
河内奴鶏	河内奴	昭和18年8月24日	930 g	750 g	三重県
薩摩鶏	薩摩鶏	昭和18年8月24日	3750 g	2810 g	鹿児島県
地頭鶏	地頭鶏	昭和18年8月24日	2600 g	2000 g	鹿児島県，宮崎県
黒柏鶏	黒柏	昭和26年6月9日	2800 g	1800 g	島根県，山口県

注1. 一般名称は「日本鶏審査標準（平成9年版）[40]」による。
注2. 標準体重：満2才鶏の体重。「日本鶏審査標準（平成9年版）[40]」による。
注3. 岐阜地鶏，猩々地鶏，小地鶏を一括して“地鶏”として指定。
注4. 大シャモ，普通シャモ，小軍鶏，大和軍鶏，南京シャモ，越後南京シャモ，八木戸を一括して軍鶏名で指定。

表 3.　特定 JAS 法に定義されている在来鶏（38 鶏種）

会津地鶏，伊勢地鶏，岩手地鶏，インギー鶏，烏骨鶏，鶉矮鶏，ウタイチャーン，エーコク，横斑プリマスロック，沖縄髭地鶏，尾長鶏，河内奴，雁鶏，岐阜地鶏，熊本種，久連子鶏，黒柏鶏，コーチン，声良鶏，薩摩鶏，佐渡髭地鶏，地頭鶏，芝鶏，軍鶏，小国鶏，矮鶏，東天紅鶏，蜀丸，土佐九斤，土佐地鶏，対馬地鶏，名古屋種 比内鶏，三河種，蓑曳矮鶏，蓑曳鶏，宮地鶏，ロード・アイランド・レッド

成 17）年 10 月 5 日最終改正され現在に至っている。同法による地鶏肉の規格は，1. 生産方法の基準（素雛の出生証明，飼育期間，飼育方式，飼育密度），2. 生産工程の管理記録，3. 認証および表示についての基準などから構成されている。

特定 JAS 法で定められた地鶏とは，「在来種由来の血液百分率が 50% 以上のものであって出生の証明ができるもの」を飼養し，一定期間以上平飼いにより国内で飼育した鶏と定められている。在来種とは，明治時代までに国内で成立し，または定着した鶏品種を言い 38 鶏種（後述するが実は 37 鶏種）が定められている。別表によると，絶種が危惧されて国の特別記念物に指定された土佐のオナガドリをはじめ天然記念物に指定されている 15 品種 2 グループ（または，17 品種）とその他の日本鶏 16 品種，明治時代までに導入され定着した横斑プリマスロックとロード・アイランド・レッドである（表 3）。

一方，（社）日本食鳥協会は，鶏種，飼料，飼育方法，出荷日齢などについて通常の肉用若鶏と異なる方法により差別化を図り，わが国で飼育し，処理加工したものを国産銘柄鶏と総称し，差別化方法により「地鶏」および「銘柄鶏」に分類している。地鶏については特定 JAS 法に基づいて生産されたもので，銘柄鶏とは鶏種が通常の肉用専用種であっても飼料，飼育方法，出荷日齢などを生産・販売者が工夫し，その内容を明示したものと定めている。同協会が出版している「国産銘柄鶏ガイドブック 2007 年度版」[17] によると地鶏肉 66 商品，銘柄鶏肉 116 商品であり，そのうち特定 JAS 認定された銘柄は 8 機関 6 銘柄である。主な地鶏の産地は，徳島県，兵庫県，福島県，愛知県，秋田県，岐阜県などで鶏肉における地鶏肉市場占有率は約 1% である。

2）　特定 JAS 法の問題点と課題

特定 JAS 制度以降，地鶏の概念が多少変わりつつある。地鶏とは，特定 JAS 法で定められた在来鶏 38 品種血液百分率 50% 以上の鶏を平飼い生産されたものと一般に思われている。しかし，前述したように別表に定められている伊勢地鶏，岐阜地鶏，土佐地鶏は一般名称であり文化財保護法による天然記念物指定名称（以下，法定名称）は“地鶏”である。誤解を招く恐れがあるため一般名称を用いたものと推察されるが意に反して多くの誤解を生じている。なお，日本鶏の名称は様々な呼び名があるが，法律には法定名称を用いるべきであると考える。他の天然記念物指定鶏についても同様である。

特定 JAS 制度の別表に沖縄県のウタイチャーンと沖縄髯地鶏が登録されているが，沖縄髯地鶏は実在しない品種である。三井高遂監修・小山七郎編集[10] の「日本鶏大鑑」，小山七郎著[32]「カラー版　趣味の日本鶏」，小山七郎著[33]「原色日本鶏」にはウタイチャーンと沖縄髯地鶏（または，沖縄髭地鶏）の写真が掲載されているが，「家禽図鑑」[9]，「日本鶏の歴史」[26]，最近出版された「カラー版　日本鶏・外国鶏」[41] には沖縄髯地鶏の記載はない。峰沢[8] は，沖縄県で調査を行い「小山さんがウタイチャーンの写真を髯地鶏として紹介し，その F_1（雑種）をウタイチャーンとして誤って紹介した。訂正を要求し，訂正文も後の号で掲載されたが，訂正文の方はあまり認識されず，髯地鶏が一人歩きしているとのことであった。JAS 規格にまで取り上げられており実害はないものの訂正する必要があろう」と述べている。なお，ウタイチャーンはチャーンの名称で 1991（平成 3）年に沖縄県の天然記念物に指定された。

特定 JAS 法の在来種別表に軍鶏が登録されている。軍鶏は，標準体重によって大型・中型・小型に分けられるが中型の普通シャモ（標準体重雄 3,750 g，雌 3,000 g）以上のシャモを単にシャモと呼んでいる[26,40]。それより標準体重が小さい八木戸，大和軍鶏，小軍鶏，南京シャモ，越後シャモなども一括して軍鶏の名称で 1941（昭和 16）年に天然記念物に指定された[26]。金八鶏は 1959（昭和 34）年に秋田県の天然記念物に指定されている。軍鶏は特定 JAS 地鶏に数多く活用されているが，将来，DNA マーカー分析が導入された際の混乱を避けるためにその鶏種名を明示すべきであろう。

コーチンは，アジア原産であるがイギリスや米国で改良され近代鶏作出に大きな影響を及ぼす品種となった。わが国においても中国産コーチン，英国改良型コーチンが輸入されて実用鶏作出に利用された。輸入された年代や地域によって名称を異にし，エーコク，コーチン，九斤などと呼ばれている。名古屋種は，明治初期に尾張藩

の士族であった海部兄弟が尾張地方の地鶏と中国から輸入したバフコーチンとを交配させて交雑種を作出したのが原型で，「薄毛」，「海部鶏」などと呼ばれ，尾張地方だけではなく京阪地方まで広く飼育された[18]。1905（明治38）年に日本家禽協会は名古屋コーチンとして公認し，国産実用鶏品種第1号となった。その後，改良が続けられ脚羽がなくなり脚色が鉛色に固定されて1919（大正8）年に中央畜産会によって名古屋種と改称され，名古屋コーチンは絶種となった。しかし，現在においても名古屋種よりも名古屋コーチンでよく知られ，銘柄として使用されている。三河種は，外国種の交雑によって1919（大正8）年に確立した品種である。1904～1905（明治37～38）年頃バフ・レグホーンとバフ・プリマスロックを交配して作られた鶏種に白色レグホーン，バフ・オーピントン，名古屋コーチンが交配されて1914（大正3）年に岡崎種と命名され，さらに1919（大正8）年に三河種[9]と改名された。熊本種は，1888（明治21）年にエーコクを基礎として熊本コーチン成立，1921（大正10）年に熊本種[9]に改称，その後，1923（大正12）年に標準体型が定められた。特定JAS法によると明治時代までに国内で成立し，または導入され定着した鶏の品種と定めているが，別表には名古屋種，三河種，熊本種のように大正時代に品種として確立された鶏種も含まれている。

三井[9]，小穴[26]らは，日本鶏を大きさ，体型，羽色，鶏冠，尾羽の配列など形態学的特徴に基づいて系統分類した。分類のためには鶏の観察力，豊富な経験・知識が必要であった。1960年代以降になると電気泳動法の普及により血液型，各種臓器におけるタンパク質多型，酵素多型などの生化学的形質に対する遺伝分析が多く行われるようになり，鶏品種遺伝学的変異性や遺伝学的類縁関係を明らかにしようとする研究が活発に行われ報告されている[39]。1990年代中期以降，マイクロサテライトDNA（以下，MS-DNA）多型に基づいた集団遺伝学的解析が行われるようになった。また，ミトコンドリアDNAの塩基配列多型を利用した集団遺伝学的解析も行われるようになった。MS-DNAは，全染色体に分布し一般の遺伝子のように機能を持つDNAではないために人間における作為的選抜を受けないことが期待でき，より客観的な結果が得られると言われている[38]。最近のMS-DNA分析の研究によると会津地鶏は地鶏と冠しているが地鶏の系統ではなくむしろ小国に近いと言われている[27]。

Osman[30,31]らは，日本鶏品種と外国鶏品種，計36品種（内種を含む）についてMS-DNA多型に基づいた日本鶏の遺伝学的類縁関係を報告している。彼によると外国鶏品種と日本鶏品種は少数の例外はあるものの明確に別のグループに分かれた。外国鶏グループは，レッド・コーニッシュ，ニュー・ハンプシャー，ロード・アイランド・レッド，白色プリマスロック，横斑プリマスロック，白色レグホーン，土佐九斤，熊本種，唐丸，黒柏である。日本鶏グループは比内鶏，烏骨鶏（白），烏骨鶏（黒），白色コーニッシュとその他の日本鶏グループに大別されている。共同研究者の都築[38]は「現代版　日本鶏の歴史」と題する論文で，その内容について詳細に解説している。土佐九斤と熊本種については明治以降に日本鶏と外国鶏（コーチン）を交配して作出したものでこれらの品種の個体数が減少したために，これを復旧する際に再び外国鶏を交配している可能性を述べている。戦後，天然記念物に指定された黒柏については小国と遺伝的に大きな隔たりを持っていることを示し，黒柏は小国の黒色変異型と述べている小穴の説を否定している。唐丸についても同様に小国と遺伝的に大きな隔たりを持っていることを述べている。烏骨鶏についてはその外貌からして一般の日本鶏種とは大きな差異があるので当然であると述べているが大軍鶏関連の品種であると考えられてきた比内鶏については驚きの結果であると述べている。さらに，都築は，「小穴の著書に掲載されている比内鶏の体型はシャモを彷彿させるものであるが，しかし，現在の比内鶏は三枚冠を持つ以外はシャモと似通った外観的特徴は持っていない。小穴氏の時代から今に至る過程で何らかの新たな交配がなされ現在の比内鶏ができたのであろうか。比内鶏の遺伝学的位置については，今後，更なる研究が必要である」と述べている。

比内鶏は，江戸時代に地鶏と軍鶏の交配・固定化により作出された品種である。村松[12]は，比内鶏について，三枚冠でシャモ型であるが，シャモのように直立せず，他の地鶏と異なり体躯が非常に大きく雄体重約3.75 kg，雌体重約2.6～3 kgで，容姿は薩摩鶏に酷似していると記述している。小穴[24]は，秋田県大館町（現在，大館市）の比内鶏保存会を1937（昭和12）年から1942（昭和17）年にかけて3回の現地調査を行い，比内鶏の特徴について，雄体重3.75 kg，雌体重3 kg，背線はほとんど水平に近く，尾角は地鶏のように少々高く地鶏型であると記述している（写真1）。Nishida[20]らは，セキショクヤケイ，白色レグホン，岐阜地鶏，比内鶏，小国，東天紅，薩摩鶏，声良，軍鶏，小軍鶏，蜀丸の頭蓋骨と肢骨について30部位の計測を行い多変量解析法によって品種間の比較を試みた結果，比内鶏は大きさ，形ともに軍鶏よりも白色レグホンにより近いと記述しており，現在の比内鶏は天然記念物指定当時の比内鶏と大きさ，形ともに異なっている。なお，高安・豊川[36]の秋田県大館地区の現

写真 1.　天然記念物に指定された比内鶏（小穴[24]より引用）

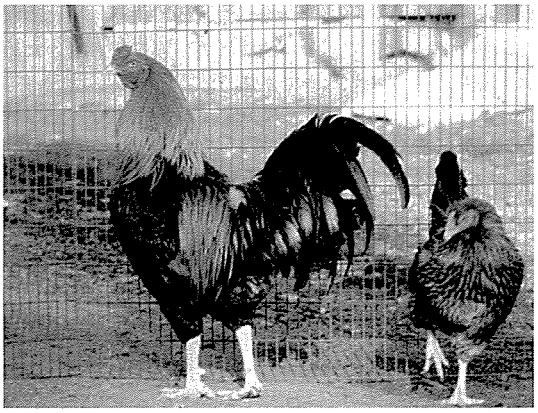


写真 2.　天然記念物に指定された当時の特徴を保持している比内鶏（比内鶏・雁鶏保存会）

地調査において，現地愛好家の 190 日齢の雄体重約 1.624 kg，雌体重約 1,256 kg と報告している。佐々木[35]らは，秋田三鶏保存会から種卵を購入し性能調査を行った結果，300 日齢雄体重約 2.20 kg，雌体重 1.84 kg であったと報告している。

現在の比内鶏は，Nishida，高安・豊川，佐々木らの報告にあるように天然記念物に指定された当時の比内鶏に比較し著しく小さくなっている。村松[15]は「本種は肉質の優秀を以って鳴る立派な実用鶏であるから，この方面に重点を置く事が肝要で，鑑賞専門の愛玩鶏と混同してはならぬ」，さらに，「現在，原産地では体重雄 3 kg 位で胴の細めのものが作られている」とかなり以前から指摘している。文化財保護法によると天然記念物に指定された保存団体には，その品種を適正に保存する義務が課せられている。また，その管理者は適正に保存されるよう管理・指導する責務がある。現在，秋田県に於いて天然記念物に指定された当時の特徴を保持している比内鶏は愛好家により保存されているが，その数は非常に少なくなりつつある（写真 2）。是非，保存に努めて欲しいものである。

現在，特定 JAS 地鶏におけるブランド保護のためマイクロサテライト DNA マーカーを用いて偽ブランドを防止し消費者の信頼を高めようとする研究がなされている[39]。この DNA マーカーによる識別法は名古屋種[21]や比内鶏[3,22,34]に於いてすでに開発されているが識別のための DNA マーカー探索に用いられた鶏群の偏りによる識別方法の適用範囲制限が残っているといわれている[39]。すなわち，両鶏種共に公共団体と鶏愛好者の所有している鶏種間において DNA が多少異なっている可能性がある。一方，名古屋種に単冠以外の鶏が混在していたり，種鶏用として販売されている比内鶏に三枚冠以外の単冠の鶏が混入している。単冠鶏である名古屋種が，都築[38]の MS-DNA 多型に基づく遺伝学的類縁関係によると薩摩鶏，地頭鶏，蓑曳鶏などの三枚冠を有する鶏種と同一グループに分類されている。また，コーニッシュは，三枚冠の鶏種であったが，肉用専用種として改良が続けられ現在市販されている白色コーニッシュは単冠である。天然記念物に指定された比内鶏は三枚冠であるが，都築によると現在の比内鶏は白色コーニッシュと同一グループに分類されており，これら鶏種においてその純血性に疑念が残る。このような鶏について DNA マーカー識別法が開発されているのが現状である。これらの研究材料には国，大学，各都道府県あるいは各保存団体が所有している日本鶏が主に用いられているが先端技術を用いて研究する際は，研究材料に確かな鶏を用いなければならないことは言うまでもない。今後，各鶏種の DNA プロファイルが作成されると大きな社会問題になる可能性がある。

現在，国内に導入されている外国鶏は，卵用・肉用などの実用目的で飼養されている鶏種が主で早熟性，強健性，多産性，肥育性など経済能力に優れている。一方，日本鶏は，今まで述べたように主として報晨，闘鶏，鑑賞などを目的に長い年月を経て固定化された品種であり，外国鶏に比較して晩熟性で生産効率が劣っている。従って，一般に日本鶏に外国鶏の優れた形質を交配導入し，継代・固定化を行い種鶏として利用しているのが現状である。今まで述べたように純粋な日本鶏は，選抜淘汰による大型化や早熟化の育種改良を行い続けても特定 JAS 地鶏に活用するには非常に困難である。特定 JAS 地鶏の交配様式に日本鶏名を付けた商品をよく見聞するが，交雑種は品種とはいえずその交配歴を明示する必要

がある。美味しい鶏肉鶏卵を商業目的で供給するためには経済効率も重要であるが消費者の信頼を失わないためにも正確な表記をすべきであろう。

お わ り に

鶏は，東南アジアで発祥し，2000年以上前にわが国に渡来した。当時の鶏はセキショクヤケイに類似する原始的な体型・羽色を備えたいわゆる古代鶏であったといわれている。その後，日本の風土，文化の中で培われつつも古代鶏の原型を保持したいわゆる“地鶏”が明治の頃まで広く飼われていた。また，後に渡来した小国鶏，軍鶏，大唐丸などと共に日本固有品種作出の基礎鶏ともなった。しかし，外国鶏の普及により地鶏は次第に減少した。岐阜地鶏，猩々地鶏，小地鶏の3品種は原始的な外貌的特徴を保持している品種として1941（昭和16）年1月に“地鶏”の名称で国の天然記念物に指定された。しかし，鶏の愛好者や研究者以外の人には品種としての“地鶏”は忘れ去られようとしている。最近，各都道府県が地域活性化のために開発・実用化した特定JAS法に基づく地鶏が普及するにつれてしばしば天然記念物に指定された品種としての地鶏と混同されている。混同を避けるためにも特定JAS法地鶏と表記した方がよいのではなかろうか。

特定JAS用種鶏の開発にあたり日本鶏に外国鶏の優れた形質を交配導入し，継代・固定化して種鶏として活用しているのが現状であるがその交配歴を明示する必要がある。また，純粋な日本鶏と混同しないような表記に改めるべきである。“地鶏”をはじめ多くの日本鶏は，日本固有の貴重な文化的資産であり保存すべき品種である。

文　　献

1) 秋篠宮文仁：人とニワトリ．pp 199-209．欧州家禽図鑑，秋篠宮文仁ら，平凡社，東京（1994）
2) 藤尾芳久：日本鶏の血液型と渡来経路．日本在来家畜調査団報告5，5-12（1972）
3) 石塚条次：比内鶏―天然記念物「比内鶏」の食味を生かした畜産試験場（秋田県）の肉用鶏開発．鶏病研報44，184-186（2008）
4) 柿澤亮三：日本における洋鶏導入の歴史．鶏病研報記念号31，13-21（1995）
5) 加茂儀一：家畜文化史．法政大学出版局，東京（1973）
6) 黒田長久・山口健児監修：「天然記念物　日本の鶏」．教育社，東京（1987）
7) 畔田翠山：「古名録」．（1843）小穴　彪，日本鶏の歴史（増補版）．86-127（1951）より引用
8) 峰沢　満：沖縄本島の在来動物遺伝資源．日本鶏48，pp 59-79全国日本鶏保存会，東京（2008）
9) 三井高遂・衣川義雄：家禽図鑑別冊．pp38-41．成美堂，東京（1933）
10) 三井高遂：日本鶏大鑑　ペットライフ社，東京（1987）
11) 水間　豊：家畜育種の沿革．pp 1-12．家畜育種学．（水間豊・猪貴義・岡田育穂）朝倉書店，東京（1982）
12) 村松七郎：秋田地鶏．秋田師範学校郷土研究室 pp 62.（1932）
13) 村松彌幸：日本鶏雑記Ⅰ　品種解説．私家版，（1977）
14) 村松彌幸：日本鶏雑記Ⅱ　小国．私家版，9-86（1980）
15) 村松彌幸：品種解説．pp 49-68．日本鶏大鑑，三井高遂監修　ペットライフ社，東京，（1987）
16) 本居宣長：「古事記傳」11巻（神代九之巻）（1730～1801）小穴　彪，日本鶏の歴史（増補版）．48-51（1951）より引用
17) 日本食鳥協会：国産銘柄鶏ガイドブック．全国食鳥新聞社，東京（2007）
18) 中村明弘，野田賢治：愛知県における名古屋種の改良とその遺伝的特性．日本鶏46，84-101全日本鶏保存会，東京（2006）
19) 西田隆雄：東亜における野鶏の分布と東洋系家鶏の成立について．日本在来家畜調査団報告2，2-24（1967）
20) Nishida, T. *et al*：Osteometrical studies on the phylogenetic relationships of Japanese native fowls. *J. Vet. Sci.* 47, 25-37. (1985)
21) 農林水産省農林水産技術会事務局筑波事務所：名古屋コーチンのDNA識別法の開発に成功．In：農林水産研究情報総合案内（2005）．URL：http：//www.affrc.go.jp/ja/news event/press/060324
22) 農林水産省農林水産技術会事務局筑波事務所：比内地鶏のDNA識別法の開発に成功．In：農林水産研究情報総合案内（2006）．URL：http：//www.affrc.go.jp/ja/research/seika/data nilgs/h18/ch06008
23) 野沢　謙，西田孝雄：日本とその周辺地域の在来家畜の由来．科学40，5-12
24) 小穴　彪：特集　日本鶏の研究．天然記念物に指定された比内鶏と烏骨鶏，鶏の研究．61-65．（1942）
25) 小穴　彪：日本鶏の歴史．pp 127-129，鶏の研究社．東京，（1943）
26) 小穴　彪：日本鶏の歴史（増補版）．鶏の研究社．東京，（1951）
27) 岡　孝夫ラ：マクロサテライトDAN多型による会津地鶏の遺伝的多様性と遺伝的位置．日本家禽学会誌45，61-65（2008）
28) 岡本　新：ニワトリの動物学．4．東京大学出版会，東京（2001）
29) 岡本　新：ニワトリの成立について．鶏病研報39，22-30（2003）
30) Osman, S.A.M. *et al.*：Genetic variability and relationships of native Japanese chickens Based on microsatellite DNA polymorphisms — Focusing on the natural monuments of Japan. *J. Poult. Sci.* 43, 12-22, (2006)
31) Osman, S.A.M. *et al.*：The genetic variability and relationships of Japanese and foreign chickens assessed by micro satellite DNA profiling. Asian-Aust. J. Anim. Sci. 19, 1369-1378 (2006)
32) 小山七郎：カラー版　趣味の日本鶏．pp 67家の光協会，東京（1978）
33) 小山七郎：原色日本鶏（付外国鶏）．家の光協会，東京（1983）

34）力丸宗弘，高橋秀彰：比内鶏の遺伝的な特徴．動物遺伝育種研究，35，65-75（2007）
35）佐々木専悦・千田惣浩・畠山義祝：県内家禽有用遺伝子の維持・保存試験―秋田三鶏の飼養性能調査―秋田畜試研報 7．B1-B6．（1992）
36）高安一郎・豊川好司：比内鶏に関する研究．第一報　発育，飼料要求率ならびに解体成績．弘大農報 17，70-80．（1971）
37）佐藤信淵：経済要録．（1826）小穴　彪，日本鶏の歴史（増補版）．48-51（1951）より引用
38）都築政起：現代版「日本鶏の歴史」日本鶏 48，pp 47-58．全国日本鶏保存会，東京（2008）
39）都築政起，後藤直樹：ニワトリおよびウズラにおける遺伝育種学的研究の 100 年．日本家禽学会誌 46，23-29（2009）
40）全国日本鶏保存会：「日本鶏審査標準　平成 9 年版」．全国日本鶏保存会，神奈川（1997）
41）全国日本鶏保存会：「カラー版　日本鶏・外国鶏」．社団法人　家の光協会，東京（2004）

Origin and Definition of Japanese Native Chickens, "Jidori"

Suguru Sato

Akita Poultry Diseases Laboratory, Co., LTD.,
739-1 Matsubara, Shirasawa, Odate-shi, Akita, 017-0002, Japan

Summary

Chickens were introduced from China, the Korean Peninsula, or the south-western islands more than 2,000 years ago. These ancient chicken breeds are thought to have resembled the red jungle fowl (*Gallus gallus*) in body type and plumage color. The Shoukoku is thought to have been introduced to Japan from China between the 8th and 12th centuries. In the Edo period, the Oh-Shyamo, the Oh-Toumaru, the Chabo, the Ukokkei, and the Cochin were introduced from Asia, since which time indigenous chicken breeds have been called "Jidori". There are about 40 native chicken breeds in Japan, and most of these appear to have been established by the end of the Edo period. Many native chicken breeds were established from "Jidori", Shoukoku, or Oh-Shamo. Many foreign chicken breeds were imported from Europe and the United States of America after the Meiji era, and the number of "Jidori" gradually declined. "Jidoris" are valuable cultural property and heritages of Japan. Three breeds of Jidori, Gifu-Jidori, Shojou-Jidori, and Ko-Jidori, were designated as Japanese National Treasures in 1941. Many special meat chickens, called "Jidori", have recently appeared in Japanese markets, and Jidori meat chickens were defined by Japanese Agricultural Standards (JAS) in 1999.

(J. Jpn. Soc. Poult. Dis., 47, 1-11, 2011)

Key words : Jidori, Japanese native chicken, Jidori meat chicken defined by Japanese Agricultural Standards, Special meat chickens